

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

原 卓史

文学の研究で表現を扱わないものはないだろうが、2023年に発表され、眼を通すことのできた書籍・論文をいくつか紹介したい。

書籍でまず取り上げるべきは、2月に名古屋大学出版会から刊行された坪井秀人『戦後表現—Japanese Literature after 1945—』である。「〈戦後表現〉という表題を掲げる本書が意識しているのも、まさに個体それぞれに固有の経験を個人が語ることがこの通有性や普遍性を帯びて他者との〈学び〉に向けて開かれ共有されていくことにある」といい、有名・無名を問わず様々な表現を取り上げていく。600頁に及ぶ考察は圧巻。2月に和泉書院から刊行された青木(秋枝)美保・前田貞昭編著『井伏鱒二未公開書簡集—ある級友への手紙—』は、高田類三宛書簡を中心に、171点もの未公開書簡を公開。第一部では、翻字とともに詳細な注が付く。第二部は、本書収録書簡をもとにした研究成果である。秋枝は、収録された高田類三への書簡を中心に、文学揺籃期の井伏が短歌を詠むことを通して表現の模索を行っていたことを明らかにした。前田は、高田宛書簡に井伏が小説とは異なる自己像を描いていたことを考察した。実証研究のお手本となる書である。3月に岩波書店から刊行された十重田裕一『川端康成—孤独を駆ける—』は、川端康成の軌跡をメディアとの関わりで論じたものである。「雪国」は「闇と光の表現」が多く「新しい表現を生み出そう」としたとし、「古都」は「海外からの視線を織り込みながら、日本のイメージを表現」したことなどを指摘。1月に花鳥社から刊行された鈴木彩『泉鏡花の演劇—小説と戯曲が交差するところ—』は、「アダプテーション」の理論を援用して、「原作には権威があるという前提を持たないという立場」に基づき、泉鏡花の小説と戯曲がどのように表現されたのかを析出。

雑誌論文では、古矢篤史「婦人雑誌における「銃後」言説形成と連載小説—日中戦争開戦期の『主婦之友』と横光利一「春園」—」(『関西近代文学』 3月)は、『主婦之友』のジェンダー規範を装いながら「戦時下に創出されたジェンダー規範」とは別の女性像を描き出した「価値規範が衝突しあうテキスト」として、横光利一「春園」を評価した。ウェブ配信のみで刊行された雑誌『関西近代文学』の今後の発展にも期待したい。大西洋平「感じる」ことの再編—坂口安吾「FARCEに就て」論—(『坂口安吾研究』 3月)は、「FARCEに就て」の「純粋な言葉」を巡って考察し、同時代のプロレタリア文学や新感覚派と対置させて、「語りえない「感銘」を「言葉」にしようという「意志」によって、創作主体の感性を構築しようとした点にその独自性を見ることができるとした。戸塚学「「物語」の反響—中里恒子「野薔薇」—」(『芸術至上主義芸芸』 11月)は、中里「野薔薇」は堀辰雄「物語の女」に影響を受けた作品ととらえ、堀の作品が「人物同士」の「感情の輪郭を曖昧」にとどめたのに対して、中里の作品はそれらを「別様」に書いて見せたという。最後に、多くの遺漏を許されたい。

(尾道市立大学)